

蘇芳集

冬ざくら

高橋 さえ子

清流の石しろじろと野菊かな
さざなみに起伏がありて去ぬつばめ
霊跡の水はしろがね秋日傘
お会式や五重塔のまぶしくて
冬ざくらほつと池上本門寺
街路樹の公孫樹の影や日蓮忌
梅探る川は流れを急がざる

綿虫と

青山

丈

子が先に角を曲りぬ七五三
綿虫と公園を出てそれ以来
帰りには帰りの道の笹鳴けり
いつまでも一つの残る冬林檎
老後にも数へ日といふ日のありぬ
煤逃げの大きな沼に来てしまふ
だらだらとした坂下りて年の内



航跡 前田陶代子

吊皮の十一月の色摺む
ひかり紡ぎて晩秋の波幾重
航跡のぐいぐい白く今朝の冬
冬薔薇のけふの紅さを恃みとす
脱ぎて置く服に冬日の匂ひかな
考への貧しくをりぬ白障子
指先で洗ふ糸底夕しぐれ

蝶の影 宮尾直美

秋水の激つ白さへ蝶の影
かばかりのこと生甲斐や冬の菊
立読みの本の重さやそぞろ寒
古き家をいまでも守りて石路の花
大工来てサッシ屋が来て日短
静かなる波の面や番鴨
来し方の茫々たるに月の鴨

敗荷 八木下末黒

十月の百日紅や何事ぞ
色いろな山茶花見るや上野山
敗荷や橋の擬宝珠に掌を置いて
供養碑のふぐとすつぽん蓮枯るる
碑のうしろ一叢竹の春
敗荷を抜けて来たりし無縁坂
雁渡しカレーうどんの旨くなる

酉の市 吉田幸敏

灯を入れてよりの威勢や一の酉
熊手市手締めさざなみなす薄暮
二の酉へ裸電球取り外す
二の酉の点してよりの一途かな
星の出で掲げる熊手翔びたがる
酉の市の裏へとまはる飛不動
三の酉なくて過ぎけり一葉忌

印鑑

小川美知子

印鑑は上の抽斗冬に入る
葱買つて環状七号線渡る
茶殻捨てまだ起きてゐる冬の月
屈託の赤いコートを買つてしまふ
声若き車内放送山眠る
電話切る時大枯野思ひけり
褒貶は十一月のちぎれ雲

初句会

金田きみ子

老いて今出来る何々年用意
寒柝の強打は己れ励ますや
人憶ふ引窓に射す寒の月
愛らしく老いの被りし毛糸帽
人待ちの掌にお年玉はや握り
生涯を凡婦で通し七草粥
おしやべりも交へ二人の初句会

掘炬燵

上林孝子

七曜の何なく過ぎて残り菊
梨食みて話題あらかた逝きし人
老人に若き友あり掘炬燵
送り出てしばらく風のねこじやらし
戻るは暮るるに似たり萩の花
目覚めては悔のみの日々露滂沱
黄落といふこと人にもありやなし

花ひひらぎ

木内憲子

しんかんと冬立つ一樹一樹かな
神留守の片を付けたきこと二三
老人もゐる十一月の日向
人ごゑのすれ違ふとき冬めける
二の酉と思ふ日暮を急ぎけり
くちびると花ひひらぎがや冷ゆる
湯ざめして己が眉さへうすきかな